

2016岡山市芸術祭

岡山市民の文芸

第48回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

花一輪、女の一生

東 めぐみ

凍てついた清澄な大気に凜として佇む白椿
その潔さと優しさに微笑みたくなる
厳しさと優しさを併せ持つのは
椿の中でも白椿だけかもしれない

ふと視線をめぐらせてみる
我が家には様々な種類の椿があるが
一つとして同じ色のものはない
紅 白 ピンク 斑入りの白
艶めく妙齡の娘のような紅色
汚れなき乙女を彷彿とさせる真白
あどけない童女のようなピンク
そして雪のような純白でありながら
ほんの少し紅が混じった白
中でもいっとう好きなのは紅入りの白椿だ

何故なのだろう
私は椿を見ると
女性を連想してしまう
その色や形である年代の
どういう風な女性かをイメージして
花の姿に重ねる
私の好きな紅入りの白椿は
さしずめ少女から大人になりかけている
微妙な年頃だろうか
潔癖さを示す純白にほんの少し
傍で見なければ判らないほど僅かに
紅が散ったその色は
天真爛漫な女の子が
少しずつ大人への階段を上ってゆく姿に
似ている
いつもは無垢なのに
時々ハツとするほどの妖艶さが
その仕草や表情に混じる

真冬の凍てつく庭に佇みながら
私はしばし椿たちを眺める
それぞれの色をうつろいゆく
女の一生の瞬間瞬間に重ねながら

招待状

岡田房子

夕陽が沈むころ 看護師さんが
食事を運んで来る 同室の向かいの女性の
テーブルには何も置かれない 栄養剤の
入った管を指差し彼女はさりとて言う

「難病で ずっと絶食なの
だから私のご飯はこれよ」

彼女を前に食事を取るのが

いたたまれない私は できるだけ

音をたてないように静かに食べ物^を口に運ぶ

彼女には息子の勇太君がいる

学習発表会で勇太君はハーモニカを演奏する

うまく吹けなくて幾度も先生に

叱られるけれど お母さんに聞いてほしくて
懸命に練習している

日曜日の朝 お見舞いに行くとき

カバンの奥に 発表会の招待状を忍ばせた

「もし手術を受けなければ、退院は

しばらくの間無理ですよ」

お医者さんがお母さんに告げるのを

病室の入り口で聞いた勇太君

「……………」

俯くままのお母さんをはじめてみた

いままでで一番ていねいにかいた招待状

お母さんがベッドを離れたとき、勇太君は
唇をきゅつと結び それをゴミ箱に捨てた

勇太君が帰ったあと、くしゃくしゃになった

しわを何度も伸ばした

——お母さんへ

ぜったいにぜったいにきてください

彼女の瞳からぼろりぼろり、涙が零れ落ちた

一文字一文字に込められた勇太君の思いが、

大きな迷いからすうっと掬ってくれた

翌朝、彼女はお医者さんに告げた

「どんな辛い治療でも受けます

先生、手術をしてください

息子のハーモニカを聞きたいのです」

伝言

栗原由美

通勤時に見る中学生の登校風景
暑さが増してくる季節には
あの水筒で足りるのだろうか
何も持たない子は何で持っていないのか
行くだけで汗だくだろうに
雨の午後
ずぶ濡れの高校生
明日着る制服はあるのだろうか
カバンの中身は大丈夫なのか

毎日毎日頑張っているんだねと
全く知らない子らの向こう側には
十数年以上も前の息子たちの姿が見えてくる

部活を辞めたことを告げられず
自転車であちこち遠回りをしながら
時間を潰しては
夕暮れに帰ってきていた長男
サッカー部のキャプテンをして
推薦枠で入った高校で不登校になった時
あの頃もつとはめを外していたらと
振り返る二男
剥離骨折で苦勞をした
それでも野球を続けていたから
甲子園を目指すのかと思っていたら
あっさりと辞めてしまった三男

みんなそれぞれに抱えきれない何かと
戦ってきたんだよね
いろいろなことに気づいてやれなかった
優しさも余裕も持てなかったばかりか
頑張れ頑張れと言い続けていた

今を何かと戦いながら
それでも登校していく君たちに
いつも頑張れとは言わない
いつも笑っていてとは言わない
ただ通りすがりのおばさんでも
君たちのことを心に掛けているよと

最後の言葉

岡 由美子

道沿いの花壇に
白い小菊が 群れて咲いている
清らかに 凜として
花陰から 突然聞こえてきたのは
九月に逝った Mさんの声
妻の御霊に 白い小菊を飾ってつかあさり
ありがとう ありがとう
これは Mさんが私に言った 最後の言葉

Mさんは 一〇一歳
ここ数年 ヘルパーの支援を受けながら
独居生活を送っていた
Mさんの一日は
祈りに始まり 祈りに終わった
食事も 歩行も 排泄も
支援なしでは不可能だったが
Mさんの気力には 脱帽するばかり
弱音は いっさい吐かず
感謝と前向きな言葉に あふれていた
Mさんと
四つの事業所のヘルパーとは
固く結ばれていた
信頼と尊敬 感謝と真心 という絆で

Mさんの体力は もう限界だった
亡くなる前の日
昼の支援に 私が入った
妻の命日に 白い小菊をと切望され
三軒の花屋を巡り やつと花を手に入れた
Mさんは安堵の声をあげ 白い小菊を愛でた
ありがとうの言葉を 繰り返した

次の日の夜 Mさんは静かに旅立った
死と隣り合わせの状況の中で
亡き妻の御霊に
花を手向けたMさん

目の前に咲き誇る 白い小菊に想う
人間の真のやさしさ
真の強さ とは何かと

「いいこと貯金」のススメ

田房正子

「いいこと貯金」

それは 相手にうまく届かず
実を結ばなかった優しさを貯めておく
あなたのココロの貯金です

たとえばあなたが

切符の自動販売機の前で

どのボタンを選んでいいかわからず
戸惑っている様子の人を見かけた時

「どうかされました？」と声をかけると
だいたいの人は

「ご親切にありがとうございます」と言うでしょう
おおかたの人は

あなたの差し出した優しさを

感謝して受け取ってくれるはずで

でも まれに あなたのせつかくの優しさが
相手にとつて いらぬおせっかいだったり
相手の望みとは少しズレていて

上手に受け取ってもらえなかった時

「空回りしたなあ、やめときやよかった」と
ふてくされたりしないでください

それは「いいこと貯金」のチャンスです
そう思う代わりに

「いいこと貯金が貯まった！」と思えば
へこんだココロも 少しふくらみ

返品されて お役に立てなかった優しさも
捨てたりせずに

あなたのココロで温めておけば
また次の誰かのために使えます

「今日 貯まった！」と

高校生になるワタシの二人の娘たちが
時々 聞かせてくれます

空回りの 苦笑いのエピソードと共に
それぞれのココロにも

「いいこと貯金」が貯まっています

通帳もなく 目にも見えない貯金ですが
考え方しだい、あなたのココロを
少しでも晴れやかに

そして ふくよかにしてくれる
おすすめの貯金です

【短歌】

◎岡山市長賞

つば広の帽子の雲を斜に被り伯耆大山が夏を装ふ

竹原省三

◇岡山市教育委員会教育長賞

泣きつつもほつとしている娘の顔を夜の夢に見て吾は目覚めぬ

戸川治子

幼子のポケットに潜む宝物つるつる石と玉虫の骸

若林とし子

相槌をタイミングよく打って母理解出来ずも仲間となりぬ

河本律子

自分史に残せぬことのふたつみつ胸うち深く凍らせている

長畑美津子

【俳句】

◎岡山市長賞

真つ青な故郷の空へ早苗投ぐ

本城道正

◇岡山市教育委員会教育長賞

思春期の掴めぬ心ところてん

小山博子

告知にはふれぬ夫婦や朧月

阿部ひふみ

七夕や迷子保護所に老女坐す

山本一男

炎昼のマウンドに立つ孤独かな

岸野洋介

【川柳】

◎岡山市長賞

落日の命を抱く五感の炎^ひ

吉崎初恵

◇岡山市教育委員会教育長賞

荒海にもまれし貝の口固し

佐藤一子

ふんわりと話の裏を仕舞い込む

石川功

喜寿ですねいいえ心は乙女です

花房富恵

水の無い川の深さか母を見る

氷見心咲

【随筆】

◎岡山市長賞

蠟梅

岡 由美子

わが家の小庭の西側には、樹齢五―六十年になる蠟梅の木が立っている。この花の香りが大好きだった義母の思い出の木として、植えたものである。毎朝、洗濯物を干しながら蠟梅の木と対面するのが、私の日課となつて久しい。その度に、亡き義母のやさしい面影が、ふっと脳裏をよぎっていく。

春の初め、裸木から萌え出た蠟梅の若葉は、日一日と青さを増し、夏を迎えるころには、涼やかな木陰を作った。庭のどの樹木よりも濃い緑葉をそよがせながら。

やがて、秋の深まりとともに、蠟梅は身にまとう衣の色を、ゆつくりとしたペースで脱ぎ変えていった。木全体が透き通るような黄土色に染まったのは、初霜が降りてしばらく経つてからのことである。師走を迎えても、二十センチ程もある細長い葉っぱの多くが、まだびたりと小枝に身を寄り添わせていた。

カンカンに凍て付いたある朝のこと、いつものように洗濯干し場にたたとたん、懐かしい香りが鼻をかすめた。

「あつ、咲いたんだわ！」思わず声が出た。香りの主に近づき、そうつとのぞきこむと、葉っぱの茂みの中に、クリーム色の丸いつぼみが見えた。小枝中に二つずつ仲良く向き合っている。その中のいくつかが開花し、辺りに甘い香りを運んできているのだった。

つぼみがほころび、香りが日ごとに芳しさを増していくのとは反対に、それらを包み込んでいた細長い葉っぱたちは、風に誘われては、ひらひらと舞い散っていった。

ある日、天辺に残っていた数枚の葉っぱが偶然、私の目の前で静かに枝を離れ、木の根元に舞い降りたのである。まるで、別れの言葉を告げるように。そして、蠟梅の薄黄色の花だけが、神々しく気品に満ちた姿で、年の瀬の空に浮かびあがった。目の前で展開された光景に、ある種の感嘆を覚えた。

今年は、大切な人々との別れが相次いだ年だった。嫁いだからこの方、よき相談相手だった隣人のFさんとKさんが、病気で急逝した。俳句の楽しさを教えてくれたTさんや尊敬していた元同僚、世話になった二人の叔父も、闘病の末他界した。悲しみ、寂しさ、後悔……。こみ上げる思いは尽きないが、蠟梅の葉が旅立っていったように、すべてに最後の時は訪れるのだと、改めて思う。

いずれは、この美しく咲き誇る花々も、終わりの時を迎え、木の根元に降りて眠りにつくことだろう。そして、先に行った葉っぱたちとともに、水に溶け、土に染み込んで、再び新しい葉っぱを生み出す力となるに違いない。それぞれに形を変えながらも、命は確かに受け継がれ、永遠に生き続けることだろう。

小庭の隅っこに立つ一本の蠟梅の木。命のバトンを渡す光景を目の当たりにして、荘厳さを感じ、胸が熱くなった。自然の営みは、そのまま人間に置き換えられる様な気がする。

冬の光の中、精一杯に咲き誇る蠟梅の花が、一際輝いて見える。

フラフープ

久山 順子

おめでたい性格のようである。何気なく見ていたテレビで昔に流行ったフラフープを見た。ウエストのないうち体型の解消にはいいかもと閃いた。「あれ、どこで売ってる？」と娘に訊くと「ネットで買える」と言う。即注文、次の日にはもう入手、便利な世である。

スイスイ廻せる空想を裏切つて、一回も廻らないで落ちることの繰り返し。諦めないで続けていたら、コツがつかめて次第に出来るようになり、悦に入っている。心なしかウエストに括れができたような気さえている。出来ることなら美しく齢を寄せたい。

子らは嫁し、両親も舅姑も送り、七年前に夫は逝った。気が付けば後期高齢者の寡婦。あとは上手くあの世へ引越せたら人生は完了。不遜にもびんびんコロリと逝きたいなどと、希望を言うが、これほど不確かな願望はないのに。

赤ちゃんの時と高校卒業時に健康優良の表彰を頂いた。今でもその土台のお蔭で健康で快適なひとり暮らしが出来ている。しかし、何時かはこの暮らしが出来なくなることは必定、予測は不可能。まさかの時のために「意識不明の場合でも一切延命治療は要りません。痛みの軽減は切望する」と記し押印して、保険証に挿入である。独り暮らしには、それくらいの身だしなみと覚悟は要る。

もう少し寝ていたいなあと思つても、あえて早く起きる。『早起きは三文の徳』よりも、素敵である。早朝は邪魔が入らないから、一日が順調に滑り出す。日々の決まりごとや家事を終え、コーヒータイムを楽しむ。ああ何と言う至福。庭の手入れを楽しみ、手まめに料理を作り、読書や駄文を綴る、ひとりで居ても退屈しない。友の来訪も大歓迎。『思い立ったが吉日』で、横着しないでマメに動く。健康だからおめでたいのか、おめでたいから健康なのかは分からないが楽天気質である。

”美人にはなれぬが笑顔なら出来る“

折角、授かったあの世へ越すまでのタイムリミットだから、浚刺と颯爽と暮らしたい。

健康を過信している人の御多分に漏れず、私も医者嫌い。「健康診断だけは受けた方がいいよ」と言うが、生返事。些細な数値に一喜一憂して暮らすよりも、この命保証書ないが一生もの“と心得て、体は大切にしている。「そりゃあ、医者へ行くより大変だ」と言った人がいたが、自分の健康を守るのは医者でも薬でもなく自分だと心得る。健康寿命を生きるためには、体力もだが前向きの思考力も不可欠。娘らが、母の”自律で自立の暮らし“を、黙って見守ってくれているのは、ありがたい。事前趣意書に「十分に幸せに生きた。私が私のままで死んで行くために、延命処置をしないで下さい。ありがとう」と認めてある。

フラフープを衝動買いしてから、二ヶ月、スイスイ廻り出し見映えもよくなった。少しウエストが括れたかも、は自画自賛か。「お若いですね」と褒められれば、老人だって嬉しい。前向きに生きる活力剤なのである。

掃除当番

清川 文 香

地元の小学校を訪れる機会があった。

「若い先生たちが掃除のビデオを作ってくれたんですよ」と、校長先生がうれしそうに言われるので、早速見せてもらった。

そこに映し出されたのは、子どもたちが生き生きと掃除に取り組む姿。ユーモラスなテロップと軽妙なBGMによって、まるでミュージックビデオのような楽しい掃除の応援ビデオになっている。ただ真面目に掃除をしないと指導するよりずっと効果的だろう。

掃除と言えば、思い出すのが四十数年前のこと。

六年生の時の担任のS先生は、機嫌のいい時は気さくなお父ちゃんのようなだったが、怒るととても怖い、頑固で厳しい先生だった。

漢字が読めないと将来困るのと言って、いやになるほど漢字練習の宿題を出した。きちんと書かなければやり直しの罰がある。不平を言いながら、袖口を鉛筆で真っ黒にして機械的に漢字ノートを埋めたものだった。

S先生のクラスになると、掃除当番はローテーションで交代していくのではなく、先生が勝手に担当を決めて納得いくまで同じところを掃除させる。その場所の掃除のエキスパートにしようという計画らしい。

私は理科室担当の班になった。ラッキーだと思った。理科室は広いけれど、職員室からも遠く、先生の目も届きにくい。

何ヶ月も同じところを掃除させられたら、エキスパートになるどころか飽き飽きするに決まっている。私たちはどうやってサボるかを常に考えていた。

うっかりしていると先生が見回りにやって来て怒鳴られる。そこで、まずは机といすを隅に運び、ほうきや雑巾をそばに置いて、先生が来る気配がしたらいつでも掃除するふりができるように準備してから遊ぶことにした。

明治からの古い校舎は、歩くと床がミシミシと響いた。S先生のスリッパの足音が近づくのと、いち早く気配を察して合図を送り合い、ササッと掃除の体制に切り替える。スリル満点の掃除時間だ。

ところがある日、濡れ雑巾を投げてほうきで打つという「雑巾野球」に興じていると、突然S先生が何の前ぶれもなく中庭に面した窓からぬつと顔を出した。敵はこっそり中庭から偵察に来たらしい。

そんな不意打ちに対して無防備だった私たちは、雷が落ちたみたいに一瞬固まった。

鬼の形相の先生は水の入ったバケツを理科室の真ん中に置いて、何枚もの雑巾を絞っては四方八方に投げる。私たちはそれを拾って、その場でゴシゴシと床を磨き、汚れたらバケツに戻す。バケツの水はすぐに濁り、男子は交代で何度も何度も水を替えに行かされる。

絞っては投げ、投げては絞り、ゴシゴシゴシ……。S先生のスパルタ雑巾は永遠に続くかのように続いた。

先生のおかげで漢字に困ることは少ないが、掃除のほうは今でもあまり好きではない。

おもてなしの心

久保 早百合

私には九十九歳二ヶ月になる母が居る。伴侶、兄妹四人、親友も当然あの世の人。

その母は、今はグループホームでお世話になっている。くの字に曲った身体で、自室からリビングまで元気に歩く。洗濯物を畳み、リビングと対面のキッチンで支障のない料理を手伝わせてもらう。活き活きとしている。

母の部屋には、白寿の祝いに子、孫、曾孫たちに囲まれて撮った集合写真と白寿の記念に作った家系図が壁に飾ってある。

それらを見て認識できるのは、娘である姉と私と義妹の三人だけ。他界して四十年になる自分の夫を指差して「この人誰？」の世界。母の脳の思考回路は、生きてきた九十九年のどの時代をさ迷っているのだろうか。

先般、私の長男と孫娘の三人でホームを訪ねた。「これから何処かへ食べに行こう」。嬉しそうに言う母。「おばあちゃん、今日は時間が無いから又今度にしような」息子がストップを掛けると母は素直に頷く。「ここは何も出してあげるものが無いからなあ」。おもてなしが出来ぬことを嘆く。

痴呆になるということは、その人の「素」又は「本性」が出るものと母を見て考えさせられる。ホームの職員さんが、洗濯物の畳み方、料理のやり方を見て「この方は几帳面だったんですね」と言われる。その通り几帳面で綺麗好きだった。

来訪者には、何かお出しせねば、寝る所はどうしようかと、今でもおもてなしの心が始動する。家族が面会に行くと、ホームでは丁寧にお茶を出してくださる。母はその方に満面の笑みで「ありがとう」を忘れない。童女のように。

ホームへの支払いの日、妹と二人で出向くと、いつものように二人分のカルピスと母用のマグカップが運ばれてきた。暫く、母とのトンチンカンな会話で爆笑の連続。母にサヨナラをして、器を返しに行こうとする私に、母は自分の飲み残しを捨てて持って行くよう指示した。認知症であっても、残すのは職員さんに申し訳ないという思いが垣間見えた。

認知症になっても、品がよく、可愛い、おもてなしの心遣いを持ち続ける母。私もあやかりたいと思う。反面、自分が痴呆になったらどんな「地」を出すのかなと怖くもある。

二年前の今頃は、危険な状態だった母が、自分の足で歩き、リビングで入所の皆さんと一緒に食事が出来る。奇跡としか言いようがない。有難い。

今、百歳は珍しくないが、意外に百歳の壁を破るのは難しいと聞く。越せそうで越せない九十九歳の坂を母がクリアし、百歳の慶事を迎える日が来ることを私たちは信じている。

その日まで、あと十ヶ月!!

巣立ち

早川 浩美

我が家の前は山。竹や雑木の林は居ながらにして森林浴と野鳥観察を楽しませてくれる。

春は野鳥たちの巣作りの季節。次々に野鳥がやって来る。「ツツピー」と鳴くのはヤマガラ。「デデポー」と山バト。メジロ、カワラヒワ、ヒヨドリ、セキレイ……見ていて飽きない。

この春、仕事やボランティアで出かけることより家にいることが多かった。そのおかげで、ホオジロとツバメとヒヨドリの巣立ちに立ち会うことができた。

四月中旬、ホオジロの巣を庭の雪柳の中に見つけた。巣の中には卵が五つ。親鳥が昼も夜も温め続け、無事五つのひながかえった。

それまで一羽しか見えなかった親鳥が二羽になった。エサを運ぶのは夫婦で協力するようだ。夜になると一羽は巣に帰り、卵を抱いていたときのようにひなを抱いていた。

雨の日は一日中巣に座っている。ひなを雨に濡らさないように自分が屋根になっているのだ。卵の時と違って、巣は手狭になつてきている。ひなは窮屈なのか時々動く。そのたびに親鳥は座り直し、ひなが一羽も雨に濡れないようにしている。頭も背中もびしょ濡れになりながらも子どもたちを守っていた。

そうしてついに巣立ちの日を迎えた。庭で草取りをする私の目の前に一羽目のひなが転がり落ちるようになり飛んできた。

二羽目、三羽目も巣から出た。上手く飛べないのならまた巣に戻るのかと思えば、もう帰ることはしない。巣は空っぽになった。

間もなくエサをくわえた親鳥が帰って来た。巣にひながいないのに気がついて「チイチイ」と、必死の声で鳴いている。ひなはひなで必死に鳴いている。巣立ちに際して飛び方やエサの取り方を教わる間もなく親子は別れてしまうのか。生垣のツゲの木の中にひながいる。その同じ木の下に親鳥がいる。その間わずか三〇センチ。でもお互いに出会えない。親と子の悲しい声ばかりが響いている。空からは非情にも雨が降り始めた。

居たたまれなくてその場を離れた。声は、やがて親鳥の声だけになり、暗くなるまで聞こえていた。翌朝も聞こえていたがいつのまにか聞こえなくなった。

ツバメも親鳥は子の巣立ちを知らなかったようだ。こちらは、巣から出て電線に止まっているところを見つけ、エサを運んでいた。

ヒヨドリは幼さを残した声で必死に鳴くひな鳥をやはり親鳥が必死の声で探していた。

そうして季節は夏へ。ひな鳥たちが巣立った後の林はがらんとしている。

「ね、ひな鳥たちが巣立ったらこの林、すごく静かになっちゃったよ」と、夫に言った。

「そりやウチと同じじゃが」と、夫は答えた。

我が家も春に娘が嫁いだ。この春私が家にいることが多かったのはそのためだ。

「ほんとに……」

後の言葉が続かない。涙がほろつとこぼれた。